

神戸市

御 蔵 遺 跡

—第8・9・10次調査—

2000年12月

神戸市教育委員会

神戸市

御 蔵 遺 跡

—第8・9・10次調査—

2000年12月

神戸市教育委員会

序

平成7年1月17日未明におきた阪神・淡路大震災は、神戸市にも甚大なる被害を与えました。多くの大切な生命を失い、地震による家屋の倒壊、火災による家屋の焼失という過去に例のないほどの大惨事でした。文化財においても、倒壊したり、焼失したりと貴重な国民の財産に大きな被害がおよびました。神戸市では、復旧・復興事業を円滑に進めるとともに、将来の文化的な発展にも目を向けていかなければならないと考えております。被災した文化財の保護もその一つであるといえましょう。

本書で報告する御蔵遺跡の位置する長田区御蔵通も、神戸市内でも最も大きな被害を受けた地区の一つです。発掘調査は、当地区において震災復興とともに共同住宅および社屋の建設に先立ち、行われたものです。調査の結果、当遺跡が弥生時代後期まで遡ることが明らかになるとともに、奈良時代の建物跡もみつかり、貴重な資料となりました。

これらの成果をまとめた本書が、復興の足跡の記録として、また学術研究、教育・普及の資料として広く活用され、復興事業・埋蔵文化財保護へのご理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただいた兵庫県教育委員会、同埋蔵文化財調査事務所、ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成12年12月28日

神戸市教育委員会

教育長 木 村 良 一

例 言

1. 本書は、神戸市長田区御藏通5丁目に所在する御藏遺跡の第8次・第9次・第10次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、阪神・淡路大震災の復興事業に伴う事前調査であり、神戸市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、第8次調査を平成10年9月16日から10月29日まで、第9次調査を平成10年10月5日から10月28日まで、第10次調査を平成10年11月4日から11月20日まで実施した。第8次・第10次調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班 山田清朝・高木芳史が、第9次調査は同 山上雅弘・岡本一秀がそれぞれ担当した。
4. 発掘調査時の遺構写真の写真撮影については調査員が実施した。
5. 遺構の基準点測量は委託して行い、遺構の実測は調査員および調査補助員が実施した。
6. 整理作業は、調査終了後兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
7. 本書の作製は、山田・高木・山上・岡本が実施し、第8次・第10次調査を山田が、第9次調査を山上が編集し、山田が全体を調整した。
8. 本書で使用した標高は、東京湾平均海水準（T.P）を基準とする。また、方位は座標北を示す。
9. 本書に掲載した資料は、神戸市教育委員会が管理・保管している。

凡 例

1. 遺構番号は、各調査において付けた番号を使用している。なお、第8次と第10次調査は、遺構番号を連続して付けたため、番号が重複することはない。
2. 遺物番号も、第8次・第10次調査と第9次調査と別々に付けている。

本文目次

| | | |
|--------------------|-------------|----|
| 第1章 御藏遺跡..... | (山上) ... | 1 |
| 第1節 地理的環境..... | | 1 |
| 第2節 歴史的環境..... | | 2 |
| 第3節 既往の調査..... | | 4 |
| 第2章 調査の経緯..... | (山田) ... | 5 |
| 第1節 調査に至る経緯..... | | 5 |
| 第2節 発掘調査体制..... | | 6 |
| 第3章 調査の結果 | | |
| 第1節 第8次・10次調査..... | (山田・高木) ... | 7 |
| 第2節 第9次調査..... | (山上・岡本) ... | 23 |
| 第5章 まとめ..... | (山田) ... | 39 |

挿 図 目 次

| | |
|--------------------|----|
| 第1図 兵庫県の位置 | 19 |
| 第2図 遺跡の位置 | 19 |
| 第3図 遺跡の立地 | 1 |
| 第4図 主要周辺遺跡 | 3 |
| 第5図 御歳遺跡の調査位置 | 4 |
| 第6図 御歳遺跡全景（南から） | 5 |
| 第7図 基本土層図 | 7 |
| 第8図 基本土層（第10次調査） | 8 |
| 第9図 第1面 | 9 |
| 第10図 SK01全景 | 9 |
| 第11図 SK01土器出土状況 | 10 |
| 第12図 SK01梯子出土状況 | 10 |
| 第13図 SK01 | 10 |
| 第14図 SK01出土土器 | 10 |
| 第15図 梯子 | 11 |
| 第16図 SK01断ち割り（1） | 12 |
| 第17図 SK01断ち割り（2） | 12 |
| 第18図 土器溜まり出土土器 | 13 |
| 第19図 第2面 | 14 |
| 第20図 第2面の検出 | 14 |
| 第21図 第2面全景（第8次調査） | 15 |
| 第22図 第2面全景（第10次調査） | 15 |
| 第23図 SD01 | 16 |
| 第24図 SD02全景 | 16 |
| 第25図 SD02 | 16 |
| 第26図 第3面 | 17 |
| 第27図 第3面の検出 | 17 |
| 第28図 水田跡（北東から） | 18 |
| 第29図 水田跡（北西から） | 18 |
| 第30図 第4面 | 19 |
| 第31図 第4面の検出 | 19 |
| 第32図 第4面全景（第8次調査） | 20 |
| 第33図 第4面全景（第10次調査） | 20 |
| 第34図 SD01 | 21 |
| 第35図 SD04全景 | 21 |
| 第36図 SK02 | 21 |
| 第37図 第9次調査平面図 | 23 |
| 第38図 土層断面（第9次調査） | 23 |
| 第39図 基本層序（西壁北側付近） | 24 |
| 第40図 調査区全景（南東から） | 24 |
| 第41図 調査区全体図（第9次） | 25 |
| 第42図 SH01平・断面図 | 26 |
| 第43図 調査風景（南から） | 27 |
| 第44図 調査前の状況（北から） | 27 |
| 第45図 SH01（南東から） | 28 |
| 第46図 SB01（北から） | 28 |
| 第47図 SB01平・断面図 | 29 |
| 第48図 P 8（東から） | 30 |
| 第49図 P 11（東から） | 30 |
| 第50図 SB02平・断面図 | 31 |
| 第51図 P 3（南から） | 31 |
| 第52図 P 4（東から） | 31 |
| 第53図 SB03平・断面図 | 32 |
| 第54図 SB04平・断面図 | 32 |
| 第55図 SK01平・断面図 | 33 |
| 第56図 SK01（西から） | 33 |
| 第57図 出出土器実測図 | 35 |



第1図 兵庫県の位置



第2図 遺跡の位置

第1章 御 蔵 遺 跡

第1節 地理的環境

遺跡の位置 御蔵遺跡は六甲山南麓に広がる神戸市街の西部に所在する。この一帯は、六甲山系に沿って東西に細長く平地が形成されるが、これらの地形は六甲山から流れ出た幾本かの小河川の堆積作用によって形成されている。海岸付近では弥生時代前後から砂堆が形成され、徐々に陸化が始まっている。一方、山麓の谷開口部周辺は扇状地形が発達し、下流に比べ著しく標高が高くなるところも認められる。また、芦屋川や住吉川では川床が持ち上がり天井川となるなど、河川による土砂堆積が著しい。これは六甲山でしばしば起こる土砂災害でも証明されているとおりである。

立地 遺跡は苅藻川の東岸の低地に広がるが、周囲の状況から考えてこの川の自然堤防上から後背湿地などにまたがって遺跡は立地していると考えられる。また、現状地形では遺跡周辺は標高6m前後を測る低地で、遺跡内に大きな標高差は認められない。

なお、現在は遺跡の北辺から西辺にかけて新湊川が流れるが、これは近年の開削によるもので、西辺の流路は苅藻川の流路を踏襲したものである。新湊川は湊川の流路変更に伴つて開削された河川で、遺跡北辺の流路についても新たな開削によって生まれた。遺跡形成に大きく関わる苅藻川は長田神社の北方から流れる川でほぼ一直線に流下し大阪湾に注いでいる。



第3図 遺跡の立地

第2節 歴史的環境

はじめに 六甲山南麓の御藏遺跡周辺では現在のところ発掘調査はまだ少数に留まっており、周辺の詳細な様相を明らかにするには至っていない。近年ようやく調査事例が蓄積されつつある段階でいくつかの大きな成果も上がっている。しかし、市街地の中という環境にあるため様相把握はなかなか進まないのが実情である。以下、今回の成果に関連する周辺の遺跡と調査成果を述べることとする。

弥生時代 東側の湊川水系に属する大開遺跡⁽¹⁾で前期の環濠が検出されたことが特筆される。この他では楠・荒田町遺跡⁽²⁾で前期から中期にかけての居住域や墓域が見つかっている。中期になると河原遺跡⁽³⁾、東山遺跡⁽⁴⁾、熊野遺跡などが知られ、河原遺跡では壺形土器の中から40個近い数のゴホウラ製貝輪が出土するなどの成果があった。

後期では松野遺跡、戎町遺跡、長田神社境内遺跡などがあり、戎町遺跡では大型の竪穴住居址が出土している。

古墳時代 古墳時代の集落は中期から後期にかけて松野遺跡、神楽遺跡⁽⁵⁾、三番町遺跡⁽⁶⁾などが営まれる。このうち松野遺跡では5世紀代の豪族居館が検出され話題をあつめた。また、神楽遺跡では韓式系土器を伴う掘立柱建物が検出され、それぞれ一般集落には認められない様相を呈しており、本地域を考える上で重要な成果であろう。

奈良時代 奈良時代になると長田区周辺は雄弁郡に属し、郡衙推定地とされる室内遺跡がある。同遺跡からは白鳳前期の軒丸瓦や奈良・平安時代の瓦・塑像の台座などが出土した。一方、神楽遺跡では近年調査が進み奈良ないし平安時代頃の大型の掘立柱建物を見つかっている。この他、長田野田遺跡⁽⁷⁾でも掘立柱建物が検出された。また、御藏遺跡の北に隣接する地点を山陽道が通っていたとされ、幹線道との関わりも注目される。この山陽道に隣接する須磨区の大田町遺跡⁽⁸⁾は須磨駅家である可能性が指摘されている。このように奈良時代については、近年調査成果が増加しつつあり、徐々に長田区周辺の様相が明らかにされている。

平安時代以降 平安時代は長田神社境内遺跡や神楽遺跡で成果が見られた。中世では長田野田遺跡や兵庫津遺跡⁽⁹⁾で近年調査が進み成果をあげている。

註

- (1) 前田佳久編「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993年
- (2) 丸山 淑「楠・荒田町遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 1990年
- (3) 浜田耕作「貝輪を容れた索焼壺」「人類学雑誌」第36巻8号 1921年
- (4) 小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」「考古学」第4巻4号 1993年
- (5) 千種 浩「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983年
- (6) 山本雅和編「戎町遺跡第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会 1989年
山本雅和編「戎町遺跡第3次調査」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会 1994年
- (7) 黒田恭正「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990年

- (8) 菅本宏明「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981年
- 西岡誠司「神楽遺跡」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (9) 口野博史他「三番町遺跡」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (10) 島田 清「房王寺出土の古瓦に就いて」『神戸史談会会報』神戸市史談会 1937年
- 水口富夫他「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年
- (11) 兼康保明「長田野田遺跡第1次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会 1998年
- (12) 口野博史他「大田町遺跡」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1994年
- (13) 岡田章一他「兵庫津遺跡」「平成9年度年報」
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年



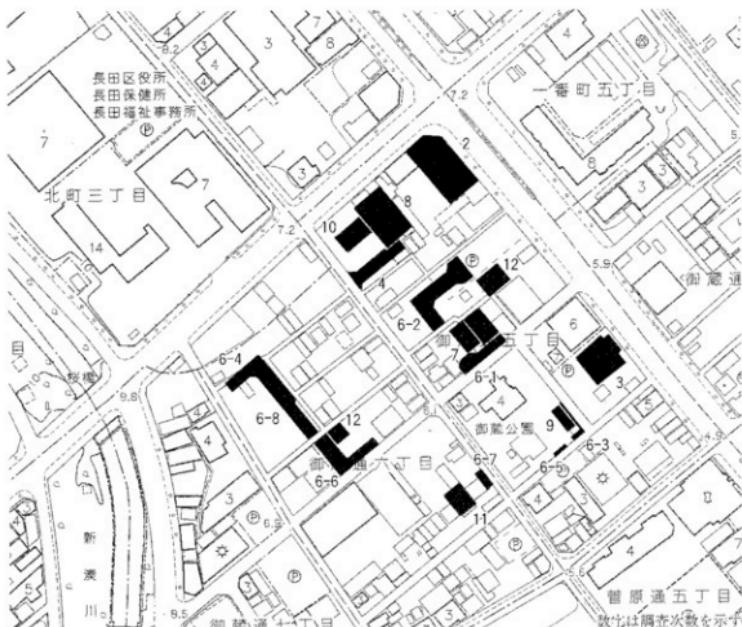
| 遺跡名 | | | |
|--------------|----------------|------------|-----------|
| 1. 鮎威遺跡 | 2. 墓坂町遺跡 | 3. 長田本庄町遺跡 | 4. 長田野田遺跡 |
| 5. 若松町遺跡 | 6. 二条町通跡 | 7. 松野遺跡 | 8. 太田町遺跡 |
| 9. 沢町遺跡 | 10. 千歳町遺跡 | 11. 念仏山遺跡 | 12. 犬籠遺跡 |
| 13. 元町遺跡 | 14. 大日堂一石五輪卒塔婆 | 15. 神奈遺跡 | 16. 三番町遺跡 |
| 17. 長田神社境内遺跡 | 18. 長田南遺跡 | 19. 五番町遺跡 | 20. 三番町遺跡 |
| 21. 兵庫津遺跡 | 22. 水木遺跡 | 23. 塚本遺跡 | 24. 大門遺跡 |
| 25. 上沢遺跡 | 26. 室内遺跡 | 27. 名倉遺跡 | 28. 敷布地 |
| 29. 黒野遺跡 | 30. 敷布地 | 31. 金下山遺跡 | 32. 清川遺跡 |
| 33. 兵庫松本遺跡 | 34. 東山遺跡 | 35. 敷布地 | 36. 菊水町遺跡 |
| 37. 河原遺跡 | 38. 敷布地 | 39. 雪荷所 | 40. 紙團遺跡 |
| 41. 横・荒田町遺跡 | | | |

第4図 主要周辺遺跡

第3節 既往の調査

御藏遺跡では平成11年3月現在で大小あわせて18次にわたる調査が行われている。これらの調査は長田区の区画整理事業に伴って行われているもので、多くの成果が得られ、御藏遺跡の様相が徐々に明らかにされている。

- 2・3次調査 今回報告の第8・9・10次調査の時点では、特に顕著な成果があがっているのは第2・3次調査などである。第2次調査は第8・10次調査の東に隣接する地点であるが、奈良時代後半の建物群などが検出された。また、第3次調査は第8次調査の東に隣接するがやはり奈良時代後半の集落と古墳時代の造構が出土している。



第5図 御藏遺跡の調査位置

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

- 第8次調査** 御蔵遺跡の範囲内に震災復興のための共同住宅建設の計画があった。調査地の東側に隣接する第2次調査において古墳時代前期以降の遺構・遺物がみつかっていることから、全面調査を実施することになった。
調査は、平成10年9月16日～10月29日の31日間実施した。
- 第9次調査** 御蔵遺跡の範囲内に震災復興のための作業場兼個人住宅建設が計画され、神戸市教育委員会が確認調査を行い、遺構と遺物を確認したため全面調査を実施することになった。
調査は、平成10年10月5日～28日の19日間実施した。
- 第10次調査** 調査対象地において、震災復興にともなう社屋建設の計画があった。調査地の東側に隣接する地区で先行して実施した第8次調査において、遺構・遺物がみつかっていることから、全面調査を実施することになった。
調査は、平成10年11月4日～20日の14日間実施した。



第6図 御蔵遺跡全景（南から）

第2節 発掘調査体制

3次にわたる調査の体制は以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古部会）

和田晴吾 立命館大学文学部教授

工楽善通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

神戸市教育委員会

教育長 輪本昌男

社会教育部長 矢野栄一郎

文化財課長 大勝俊一

社会教育部主幹 奥田哲通

埋蔵文化財係長 渡辺仲行

事務担当学芸員 東喜代秀

調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

主査 山田清朝（第8次・10次調査）

研修員 高木芳史（第8次・10次調査）

主査 山上雅弘（第9次調査）

技術職員 関本一秀（第9次調査）

第3章 調査の結果

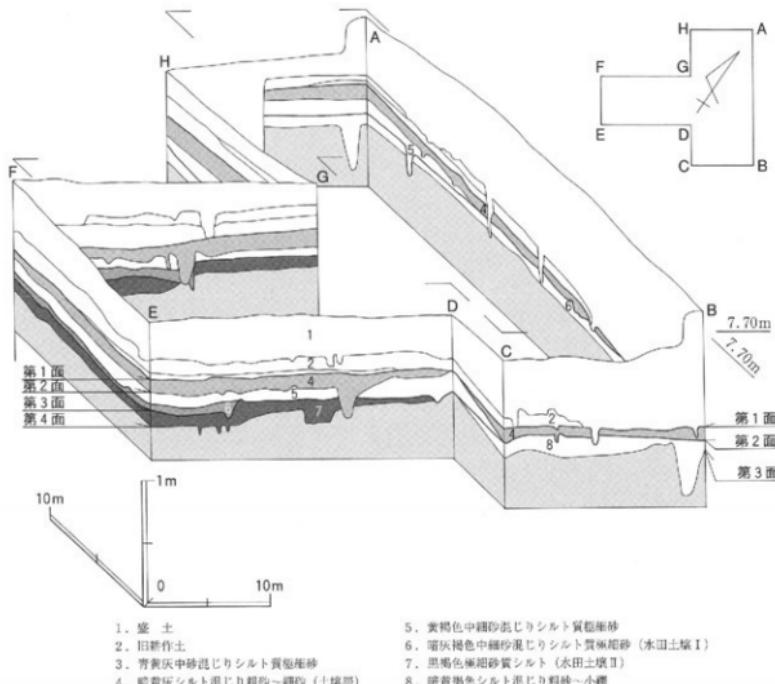
第1節 第8次・第10次調査

1. 基本層序と遺構の検出

第8次調査で3面、第10次調査で4面にわたって遺構を検出した。地形的にみて、第8次調査地から第10次調査地にかけて傾斜しているため、第10次調査地のほうが、1面多く遺構を検出している。ただし、両地区の基本層序はほぼ同じである。

第1面 旧耕作土の下層の土壤層（暗黄灰色シルト混じり粗砂～細砂—第7図 第4層）上面で検出している。当遺構面は、北西側から南東側への傾斜がわずかに認められる。

ただし、当面で検出したSK01については、後述する時期から判断すると、本来ならば第2面で検出すべき遺構であるが、偶然検出できたものと考えられる。



第7図 基本土層図

第2面 上記の土壤層の下面で検出している。本来は、第1面で検出すべきものであるが、平面的に遺構の確認が困難なため、意識的に掘り下げた面である。このため、第1面と明確な時期差はないものと考えられる。

なお、当面においては、以下の検出面で認められたような顕著な地形上の変化は認められなかった。

第3面 第10次調査のみで検出した水田面で、水田土壤層Ⅱ（黒褐色極細砂質シルト—第7図7層）の上面で検出した。水田土壤層Ⅱは、南西側へいくほどその上面のレベルが低くなつておき、北東側から南西側への傾斜が顕著である。

なお、当面の上層にも水田土壤層Ⅰ（暗灰褐色中細砂混じりシルト質極細砂—第7図6層）が断面観察において認められたが、平面的な検出はできなかつた。

この水田土壤層Ⅰを覆う黄褐色中細砂混じりシルト質極細砂（第7図5層）に、わずかに弥生時代後期の土器片が含まれていることから、水田土壤層も、ほぼこの時期に形成されたものと考えられる。

第4面 第8次調査では洪水砂（暗黄褐色シルト混じり粗砂～小礫—第7図8層）を、第10次調査では水田土壤層Ⅱを掘り下げて検出した面である。両調査で検出した最下層の遺構面である。第3面同様、北東側から南西側への傾斜が認められる。特に南隅でこの傾向が顕著である。黄褐色砂質シルト～細砂層を基盤としている。

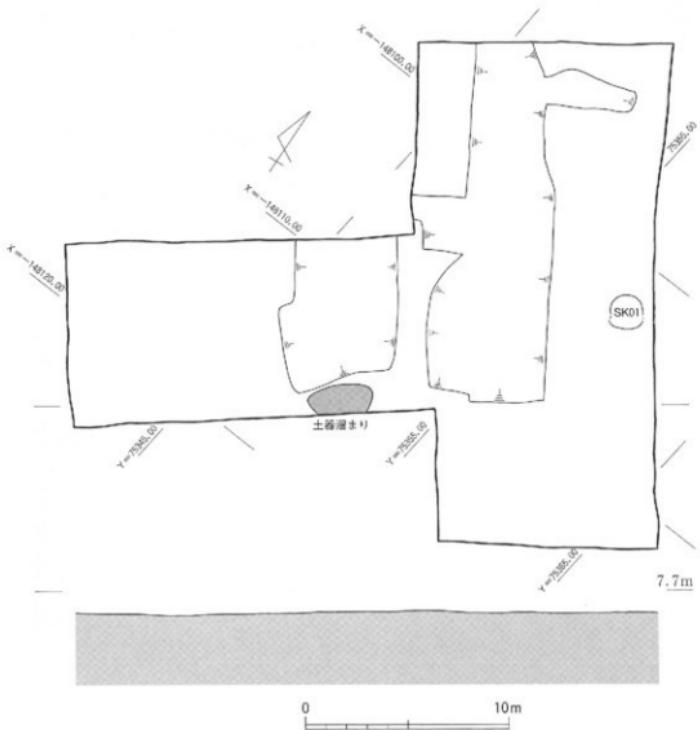


第8図 基本土層（第10次調査）

2. 調査の結果

(1) 第1面

土坑・土器溜まり・溝・柱穴を検出した。



第9図 第1面

SK01

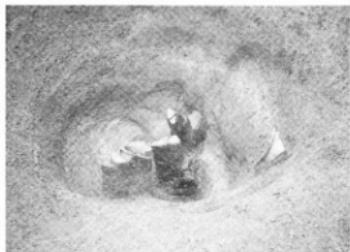
検出状況 第8次調査区中央東端に位置する。一部現代の下水道による擾乱を受けている。

規 模 平面形は円形を呈する。直径は検出面で1.83m、底部がもっとも狭く、直径0.4mである。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは1.45mを測る。

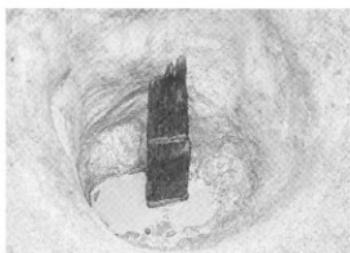
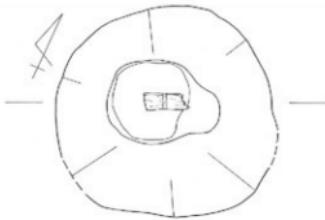
土坑の底部は非常にしまりのよい暗黒灰色シルト層を掘り込んでいる。



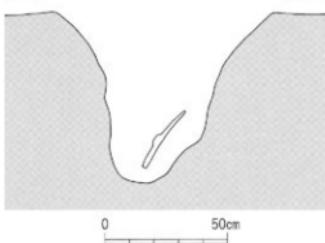
第10図 SK01 全景



第11図 SK01土器出土状況



第12図 SK01梯子出土状況



第13図 SK01

出土遺物 木製の梯子と土器が出土している。

土 器 壺・甕・高坏が出土している。比較的まとまった量が出土しているが、いずれも小片で、図化できたのは壺と甕に限られる。

壺 広口壺と底部片を図化した。

広口壺（1）は、直立する頸部から口縁部が斜上方に直線的にのびるタイプで、口径16.8cm、頸径10.7cm、残存高4.7cmを測る。頸部と体部内面はユビ抑えにより、口縁部内外面はユビ抑えと端部を中心としたつまみあげるようなナデ調整により仕上げられている。他の部位の調整については、器表面の磨滅が著しく観察できない。

底部片（3）は、外面を叩き成形後ヘラミガキにより仕上げられている。底径4.2cm、残存高2.2cmを測る。

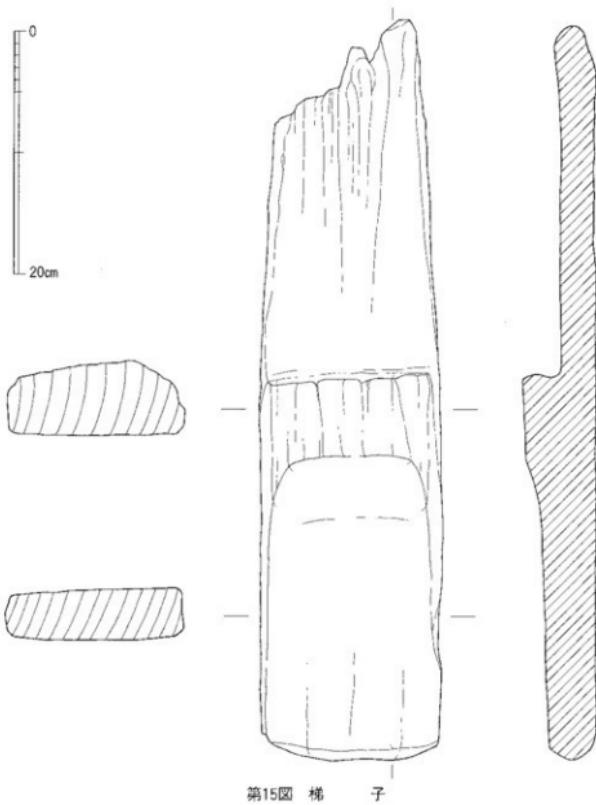
甕 口縁部片と底部片を図化した。いずれもV様式系甕に分類されるものである。

口縁部片（2）は、体部から口縁部にかけて叩き上げによる成形後、口縁部内外面をヨコナデ調整により仕上げられている。体部内面は左上がり方向のハケ調整により仕上げられている。口径16.2cm、頸径13.3cm、残存高5.4cmを測る。

底部片（4）は平底をなす底部で、ナデ調整により仕



第14図 SK01出土土器



第15図 梯子

上げられている。体部外面は叩き成形により仕上げられている。内面にはわずかにハケ原体のあたりが認められる。底径3.0cm、残存高1.8cmを測る。

出土状況 梯子の下端部が土坑底のほぼ中央部から約60°の角度をもって、土坑壁に持たれかけた状態で出土している。このことから、使用された状況を示しているものと考えられるが、梯子の下端部が土坑の底部にくい込む様子は観察できなかった。むしろ、梯子の下端部を詳細に観察すると、土坑底より若干浮いた状況を示している。

梯子 板梯子に分類されるもので、板材を削り出しステップ部分を作り出している。完存するものではなく、下端部からステップ1段分までの残存である。より上部は腐敗により消滅している。全体的に遺存状況は良好とはいえず、調整痕等は明確に観察できない。ただし、ステップ上端部は直角に削りとられ、わずかに削り痕が認められる。また、下側はゆるやかな山形に削りとられている。ただし、この部分の調整痕は明確に観察できない。

ステップの厚さは6cmで、上端部の段差は3cmである。また、ステップの上側と下側と



第16図 SK01断ち割り（1）



第17図 SK01断ち割り（2）

では板の厚みが異なり、上側は3cm、下側は4cmである。

下端部は平坦ではなく、わずかに弧状をなしている。残存長60.3cm、幅14.9cmを測る。下端部からステップ上端部までの長さは31cmである。

土坑の機能 この土坑の機能については、①貯蔵穴、②井戸の2通りの可能性をまず想定した。この点については、元々土坑に据えられていたものか、あるいは、後から放り込まれたものであるのか、出土した梯子がいざれに評価しうるかを、検討する必要がある。

土坑を断ち割ったところ、最深部は非常にしまりの良い暗黒灰色シルト層を約15cm掘り込んでいることが確認できた。掘り込まれた部分には灰褐色の粗砂が埋積しており、梯子はその上に置かれた状態である。このように、砂層を基盤とする土坑の底部が下層のシルト層を掘り込んでいるため、水が湧きやすい条件は認められ、井戸としての機能を果していた可能性は残る。しかしながら、非常にしまりの良いシルト層を約15cm掘り込んでいる点を梯子据えつけのための行為であると、ここでは積極的に評価しておきたい。そして、灰褐色の粗砂は掘削時あるいは使用期間中に湧水などとともに直上の砂層壁面から流入したと判断でき、出土した梯子が当初から土坑に据えられていた可能性は高いと考えられる。つまり梯子は廃棄されていたのではなく、実際昇降のために用いられていたと捉えられ、この土坑は貯蔵穴であったと考えられる。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

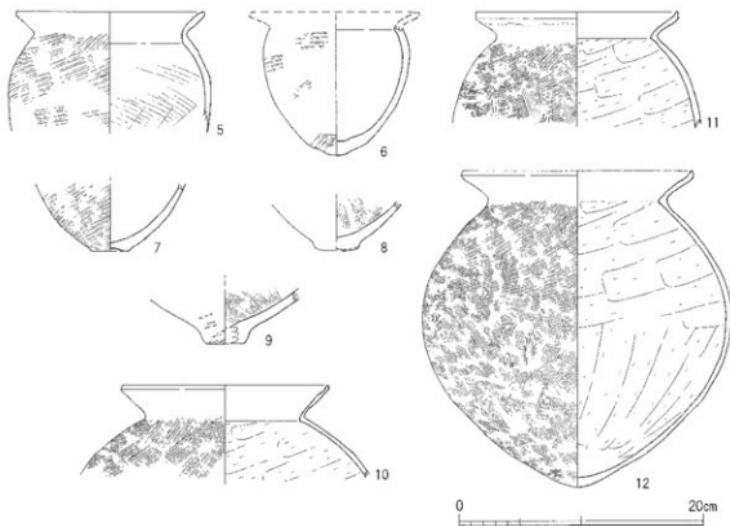
土器満まり

検出状況 第10次調査区南端やや東よりに位置する。土壤層上面で遺物の広がりを確認した。明確な掘り形は認められない。

出土土器 壺と甕が出土している。

壺 体部片と底部片が出土しているが、國化できたのは底部片（9）のみである。9は突出した平底をなすもので、外面は叩き成形により、内面はハケ調整により仕上げられている。底径5.1cm、残存高4.5cmを測る。

甕 いわゆるV様式系甕と庄内型甕の2タイプが出土している。



第18図 土器溜まり出土土器

V様式系 4個体を固化した。8を除いては叩き成形により仕上げられ、内面は、6と7はナデ調整により、5はハケ調整により仕上げられている。

3個体については底部が残存するが、突出した平底をなすものではなく、6に代表的なように丸底化の傾向が顕著である。6は丸底を意識し、叩き成形により底部をつくりだしている。5は、口径15.1cm、頸径12.4cm、体部最大径16.5cm、残存高9.9cmを測る。

庄内型 10~12の3個体である。いずれの胎土も、生駒西麓産の特徴を示すもので、当該地からの搬入品と考えられる。

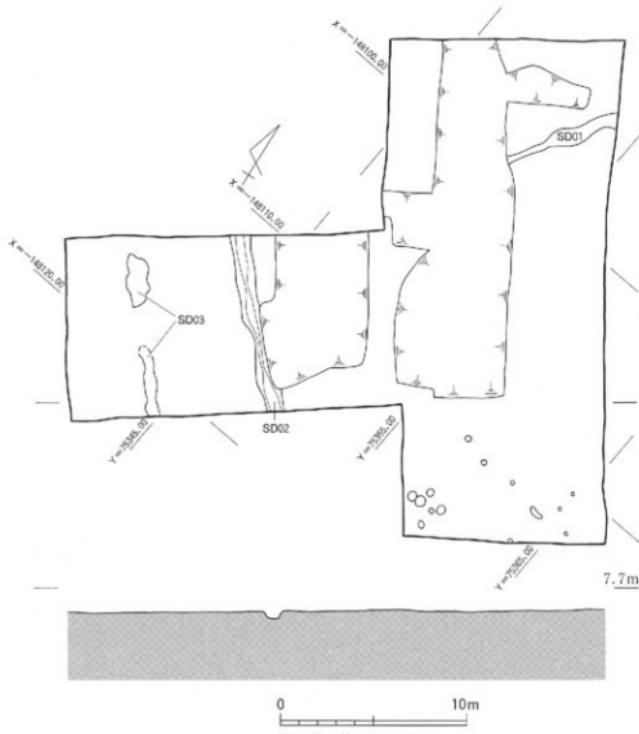
完形に復元できる12は、体部から口縁部にかけて叩き成形後、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面下半部をハケ調整、体部内面はヘラ削り調整によりそれぞれ仕上げられている。体部内面のヘラ削りは、下半を縦方向（下→上）、上半を右上がり方向に施されている。口径18.8cm、頸径14.8cm、体部最大径25.4cm、器高26.0cmを測る。

10と11も基本的には12と同様の調整により仕上げられている。ただし、10の体部外面には縦方向のハケ調整は認められない。10は、口径16.8cm、頸径13.0cm、残存高7.3cmを測る。11は、口径16.5cm、頸径13.2cm、残存高7.5cmを測る。

時期 以上の出土土器から判断して、当土器溜まりは、庄内期の良好な資料と位置付けることができる。

(2) 第2面

第1面の基盤となった土壌層を約10cmほど下げたレベルで検出された遺構である。第1面で検出した遺構とは埋土が異なるため、この面からの切り込みであると判断した。当遺構面では、第8次調査で溝と柱穴を、第10次調査で溝を検出している。



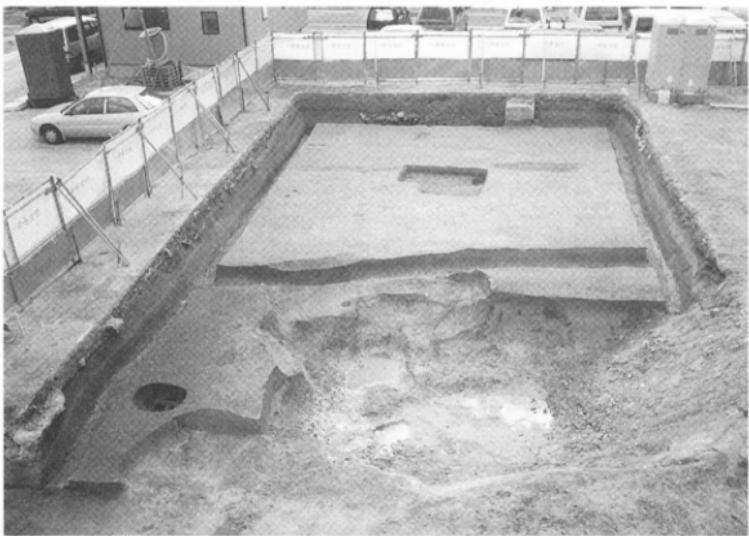
第19図 第2面



第20図 第2面の検出



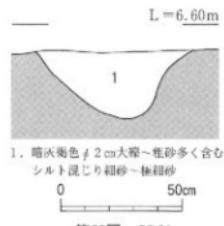
第21図 第2面全景（第8次調査）



第22図 第2面全景（第10次調査）

SD01

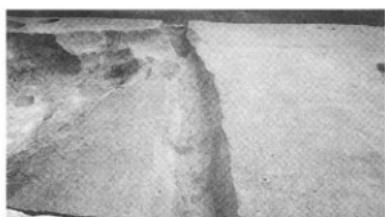
- 検出状況** 第8次調査区北半に位置する。北東一南西方向に延びる。総延長6.3m、検出面における幅65cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは30cmである。南西側は搅乱に切られ、北東側は調査区外へ続く。
- 埋 土** 暗灰褐色砂礫を含む細砂～粗砂で、比較的短期間で埋設したものであろう。
- 出土遺物** 弥生土器の小片が出土しているが、器種・時期等については明らかにできない。



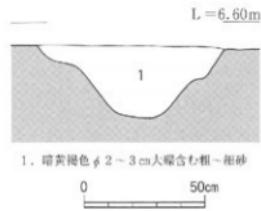
第23図 SD01

SD02

- 検出状況** 第8次調査区中央に位置する。北西一南東方向に延びており、両端ともに調査区外へと伸びる。総延長9.5m、検出面における幅78cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは30cmである。
- 埋 土** 暗黄褐色粗砂～細砂で、短期間で一気に埋没した様子が窺われる。
- 出土遺物** 弥生時代後期の土器片が少量出土した。



第24図 SD02全景



第25図 SD02

SD03

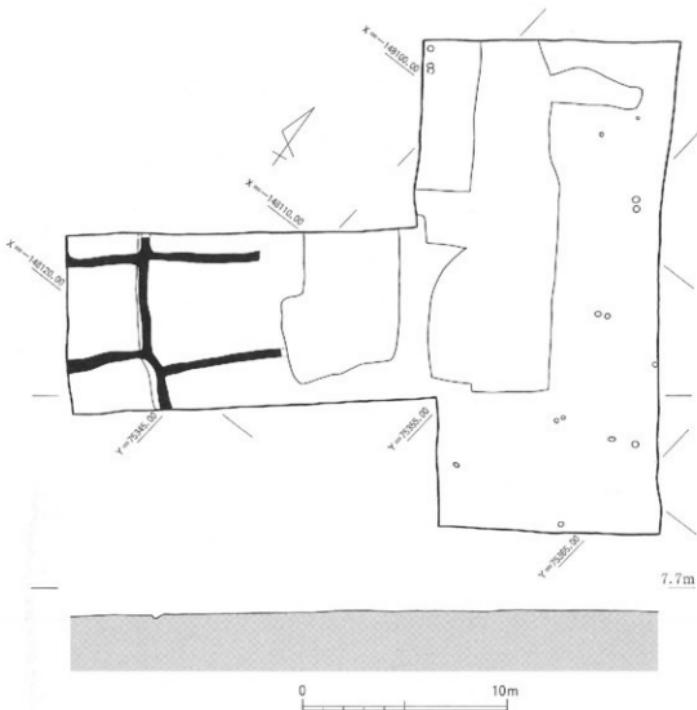
- 検出状況** 第10次調査区のやや南西端よりに位置する。北西一南東方向に延びる。遺存状態は悪く、一部途切れで検出した。幅は検出面で50～60cmを測るが、検出面からの深さは最も厚いところでも数cm程度を測るに過ぎない。このため、掘り形は明確でない。
- 埋 土** 灰褐色砂礫が薄く堆積していた。

柱 穴

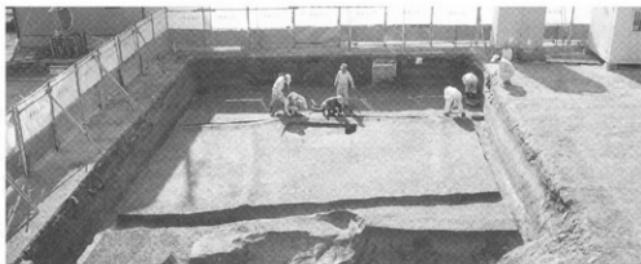
14基検出したが、建物を復元できなかった。

(3) 第3面

水田跡を6筆検出した。これは、水田土壤層Ⅰと水田土壤層Ⅱの間層にある洪水砂によって埋没したもので、水田土壤層Ⅰと水田土壤層Ⅱの間層（洪水砂）が認められない範囲では、畦畔を検出することはできなかった。



第26図 第3面



第27図 第3面の検出

水田跡

検出状況

検出した水田の中央部を北西から南東方向に1条の畦畔が通っている。この畦畔を境に、北東側3筆と南西側3筆では、水田面のレベルに約20cmの差が認められた。

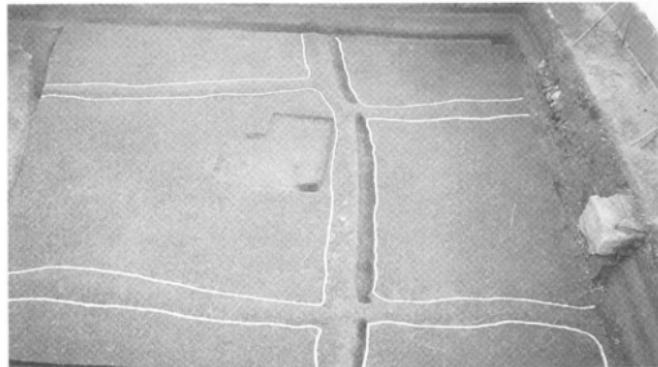
また、南西側の水田面には幅20cm、深さ20cmほどの溝が、上記の畦畔に沿って検出された。この溝は見かけ上、他の畦畔と交差する地点で途切れている。しかしながら、この地点を断ち割って精査したところ、溝を埋め、せき止める格好で畦畔が構築されていることが判った。すなわち、この溝は、各水田へ水を留めるための配水路であったと考えられる。全体に水が行き渡った後、畦畔を構築し、小さく水田を区画したものと推測される。

出土遺物

上面で、弥生時代後期に属すると考えられる上器片を検出した。



第28図 水田跡（北東から）



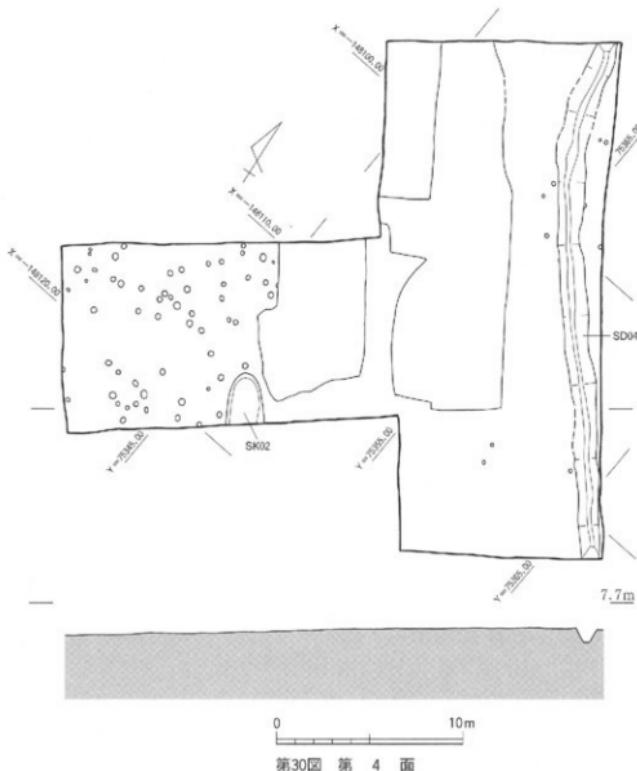
第29図 水田跡（北西から）

柱穴

16基を検出したが、建物の復元はできなかった。

(4) 第4面

土壤層Ⅱを完全に掘り下げたレベルで検出した、淡黄褐色シルト質砂をベースとする面である。検出した遺構は、溝・土坑・柱穴がある。



第30図 第4面



第31図 第4面の検出



第32図 第4面全景（第8次調査）



第33図 第4面全景（第10次調査）

SD04

検出状況

第8次調査区の北東端を北西—南東方向に縦断し、調査区外へと続く。

規模

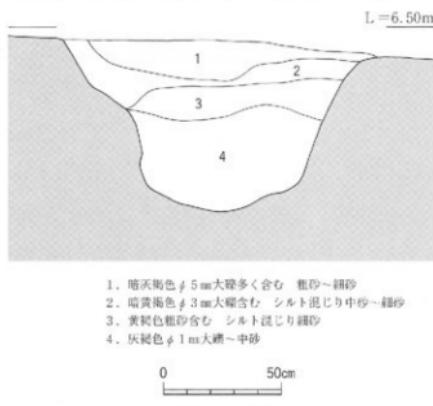
総延長は26.4mを測る。横断面はV字に近いU字形を呈し、検出面における幅1.3m、検出面からの深さ約70cmを測る。

埋土

上層は黄褐色系の中砂～細砂、下層は灰褐色砂礫～中砂で、比較的粒の粗い砂粒が厚く埋積した様子が観察され(第34図)、洪水によって埋没したものと考えられる。

出土遺物

埋土中から土器の小片がわずかに出土している。



第35図 SD04 全景

SK02

検出状況

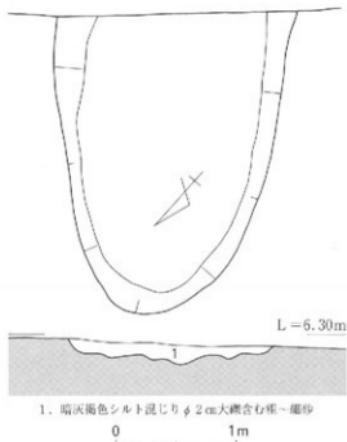
第10次調査区の南東端に位置する。人為的に埋められたもので、ごみ穴として使用されたものと思われる。

出土遺物

弥生時代後期に属する土器片が少なからず出土している。

柱穴

71基検出したが、建物の復元はできなかつた。



3. 小 結

はじめに 第8次・第10次の調査で明らかとなった遺構は、柱穴・土坑・溝・水田跡に限られる。これらの遺構のなかで、SK01についてまとめておきたい。

当土坑の機能については先述（12ページ）したとおりである。類例としては、京都府温江遺跡⁽¹⁾、新潟県下谷地遺跡⁽²⁾に認められ、両遺跡の報告とも、貯蔵穴としての機能を考えている。さらには、集落に伴う屋外貯蔵穴と位置付けている。また、西日本全域の大型の土坑についてまとめた三浦純大も、植物質食料を対象とした貯蔵用土坑と位置付けている。⁽³⁾

土坑の断面 しかし、平面規模に比較して深い点では共通するものの、断面形において若干特徴を異にする。つまり、当遺跡SK01の壁面の立ち上がりは垂直ではなく、深いU字形となっている。また、底面も平坦とはなっていない。

上記の特徴は、当遺構を貯蔵穴とするには否定的な特徴である。また、当土坑は、洪水砂を掘り込んで作られているが、底部はシルト層の上面にあたり、地下水の流路であった可能性が考えられる。したがって、井戸として機能した可能性も考えられる。

ただし、先述したように、当土坑が砂層を掘り込んでつくられていることもあり、掘削後に肩部が崩落した可能性が考えられる。また、底部についても、調査時においては湧水が少なからずあり、埋土が砂質であったことを考慮に入れると、当時の形状を留めていない可能性も考えられる。

以上から、当遺構については、貯蔵穴の可能性が高いものと考えられる。

周辺の遺跡 類例として、当遺跡周辺においては、弥生時代前期末から中期初頭の例であるが、楠・荒出町遺跡⁽⁴⁾で同様の土坑が30基検出されており、貯蔵穴と判断されている。また、後期の例としては、当遺跡とは新湊川を挟んだ西側に位置する神楽遺跡（第11次調査）において同様の土坑が3基見つかっている。このうち1基の土坑内からは、梯子は見つかっていないが、丸太を蜜柑割りした木製品が土坑底から土坑壁に持たせかけた状態で出土している点も注目される。土坑の形状・規模については、御蔵遺跡例よりも他の類例に近い特徴を示している。

〔注〕

(1) 森 正「温江遺跡」『京都府遺跡調査概報 第37冊』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990

(2) 戸根与八郎ほか「北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第19)

新潟県教育委員会 1979

(3) 三浦純大「大型土坑の機能について —能登半島の弥生時代を中心として—」『竹生野遺跡』

石川県埋蔵文化財センター 1988

(4) 丸山 漢「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980

(5) 平成10年度 神戸市教育委員会調査

第2節 第9次調査

1. 基本層序と遺構の検出

調査区

第9次調査は作業場兼個人住宅建設に先立って行われた調査で、南北に長軸を持つ長方形の敷地のうち長さ15m、幅10mの範囲を調査した。調査にあたっては、開発深度である地表下75cmまでを実施し下層については保存した。なお、周囲では隣接する道路の側溝に伴う調査として第6～3次調査が、さらに東約30mでは第3次調査が実施され成果をあげている。

基本層序

調査区の基本的な層序は整地のための砂層→現代堆積層（阪神淡路大震災被災片付ける層を含む）→旧耕土→黄橙色砂層→明褐色砂層→黒褐色粗砂層（遺物包含層）→黄灰色粗砂層である。このうち遺構検出は黒褐色粗砂層下面で行った。同層は土壤化が進み、遺物細片が多く含まれていた。

遺構

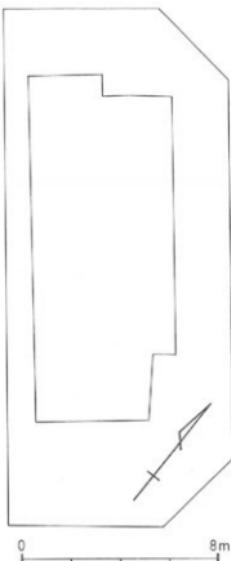
大半が黄灰色粗砂層に包含層である黒褐色粗砂層が埋没して形成されていた。但し、遺構堆積上にはシルト化が著しいものや、青灰色の還元色を呈するものも一部に認められた。

この他、後述する中世柱穴群について

は黒褐色粗砂層に黄色シルトを斑状に含むものが認められ、上層の明褐色砂の混入が考えられる埋土を有していた。

2. 遺構

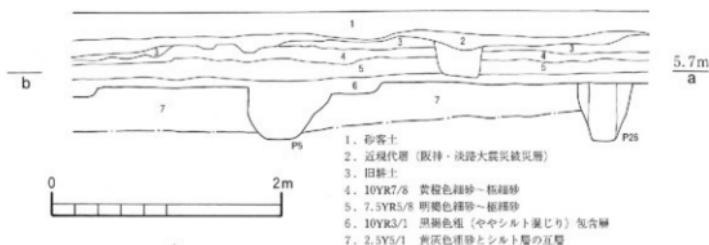
今回の調査では古墳時代の竪穴住居1棟と奈良時代の掘立柱建物4棟、土坑1基、中世の柱穴群を検出した。ただし、遺構は主として北半分に集中し、南側が希薄となる傾向が認められた。また、古墳時代の遺構は全体に希薄であるが、北側にのみ検出できた。調査区内の地形も北から南に向けてやや傾斜する傾向があり、集落立地が北から進んだことが窺わ



第37図 第9次調査平面図



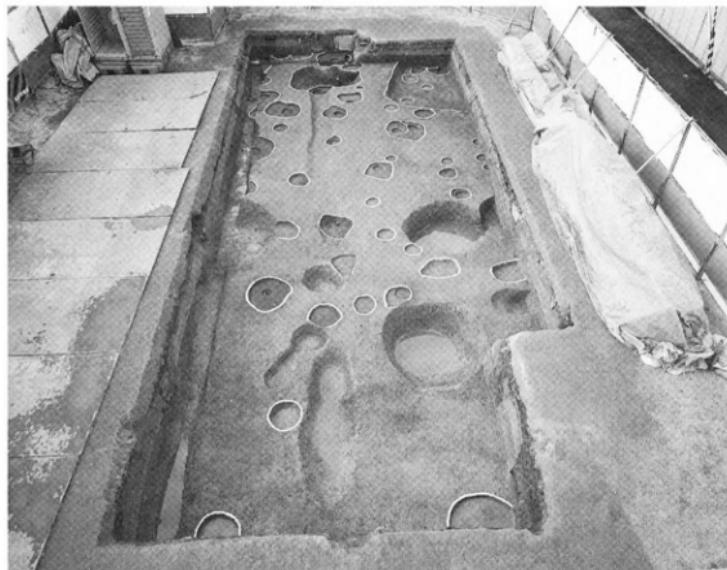
第38図 土層断面（第9次調査）



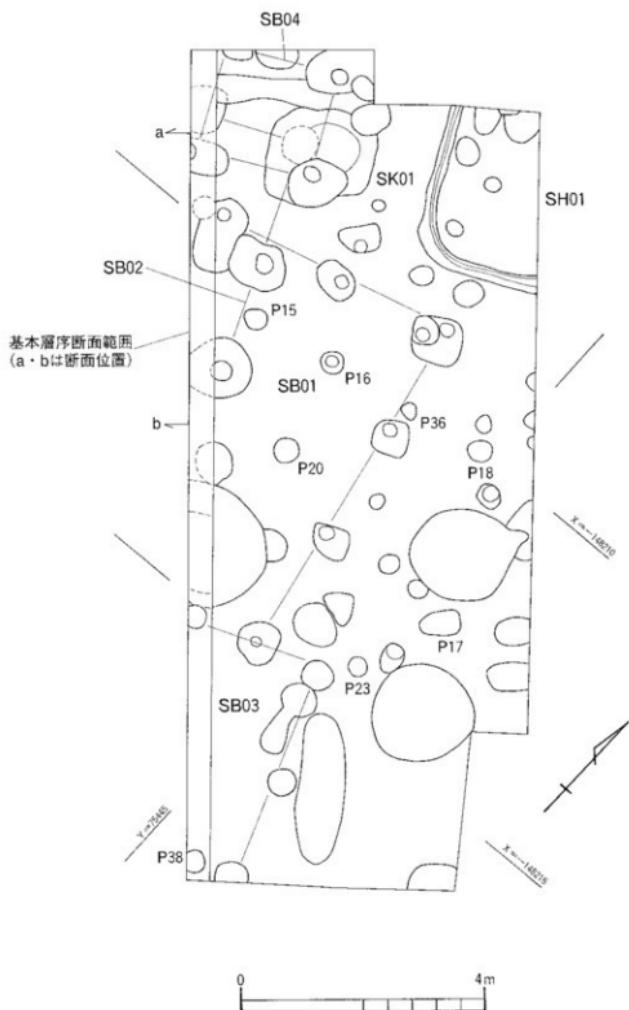
第39図 基本層序（西壁北側付近）

れる。

奈良時代の集落は最も多数の遺構を検出し、調査区全体に分布するが、傾向としてはやはり北側に集中するようである。復元できた建物は南北を軸にとるものが多いが、調査区がやや西に軸を振るため全貌を明らかにできる建物はなかった。但し、柱穴の状況からすると検出建物は大型ないしは本格的な建物であると思われ、さらに調査区周間に遺構が拡大すると推測される。中世の遺構は柱穴群を検出した。中央付近に分布するが建物を復元することはできなかった。



第40図 調査区全景（南東から）



第41図 調査区全体図（第9次）

(1) 古墳時代

堅穴住居のSH01を検出した。遺構は希薄であるが、集落は北・東方向に広がると考えられる。

SH01

検出状況

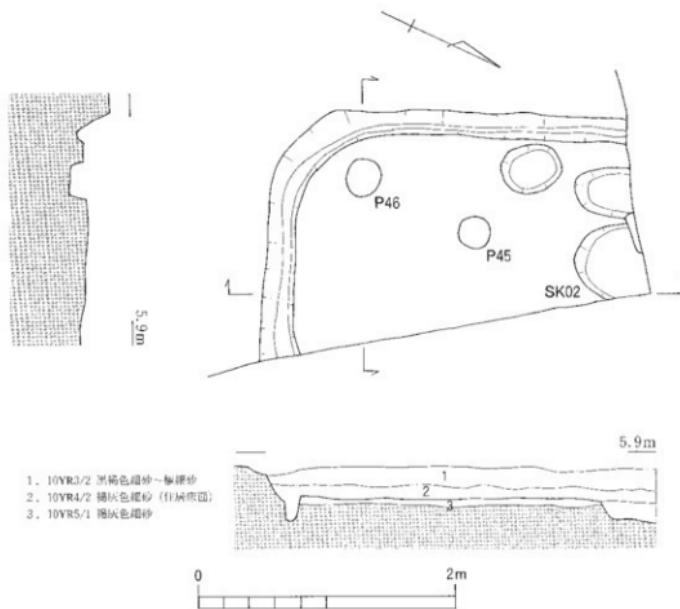
調査区北東隅に検出できた堅穴住居である。平面形は隅円の方形であるが検出できた2辺とも全体を検出できないため正確な規模は不明である。

規模

検出範囲は西辺で2.8m、南辺で2.0mである。また、検出面から床面までの深さは15～20cm前後である。内部には柱穴3基・土坑と周壁溝がある。柱穴は円形で直径は30cm前後であるが、いずれも浅い。土坑はいずれも調査区北端に分布するが、いずれも浅く、埋土には炭を含んでいた。周壁溝は幅12～13cm、床面からの深さは10cm前後を測る。

時期

出土遺物が少ないと、奈良時代の擾乱があるため時期は判然としないが、出土した遺物に生駒西麓産の甕が含まれることや須恵器が混じらないことなどから、古墳時代前期頃と考えられる。



第42図 SH01平・断面図

(2) 奈良時代

奈良時代の遺構は調査区全域に広がり、さらに周間に延びることが確実である。掘立柱建物は北側に集中し、重なって検出できることから数時期に渡って営まれたことが判明している。

SB01

検出状況 調査区西側で検出された側柱建物で、建物の東側のみを検出した。遺構はSB02と重なって検出され、N-10°-Eに棟軸の方向をとる。

規模 規模は桁行3間、梁行2間以上の建物で、桁行方向に6.2m、梁行方向に4.1m以上を測る。柱間は桁行方向が1.9~2.2m、梁行方向が2.0~2.2mを測り、面積は25.4m²以上である。

柱穴 柱穴の掘方はおおむね隅円方形で、一辺が80cm前後と比較的大型である。各柱穴で柱痕跡が確認できたが、これらの柱痕跡の観察から柱の直径は18cm前後と推定される。柱穴の深さは15~40cm前後である。特に柱底が深いものはP8・P6の2基である。また、P11には柱材の芯が遺存する。

時期 建物の時期は出土遺物から奈良時代の中頃と考えられ、P6がSB02のP4に切られるためSB02より古い建物であることがわかっている。

SB02

検出状況 P4・5・26・40は並びや形状の酷似していることから建物と考えた。但し、部分的な検出であるため今後隣接地の調査において改めて検討する必要がある。今回の調査では建物となる可能性があるという指摘に止めたい。またP26はSK01の埋土と解釈して掘削したが底部や周囲の壁の検出状況から柱穴と判断した。

時期 時期はSK01・SB01・SB04より新しいことが切り合いから判明しているが、出土遺物からすると奈良時代後半頃におさまるものと思われる。



第43図 調査風景（南から）



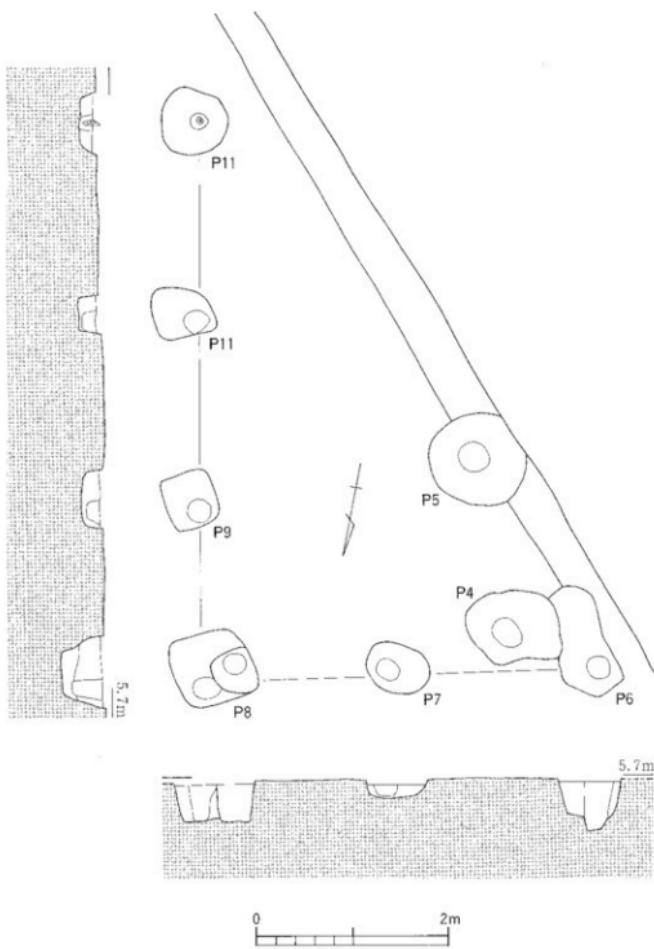
第44図 調査前の状況（北から）



第45図 SH01（南東から）



第46図 SB01（北から）



第47図 SB01平・断面図

SB03

検出状況 調査区南西で検出された。SB01の南に位置しN-20.5°-Wに棟軸の方向をとる。桁行2間以上、梁行1間以上の建物である。東辺の柱穴4基と北辺の梁行側の柱穴1基のみを検出したが規模は明らかにできない。

規模 規模は検出範囲で桁行方向に3.8m、梁行方向に2.3mを測る。柱間は桁行方向が1.85mで、面積は8.5m²以上である。

柱穴 柱穴の掘方はやや不定型な楕円形ないし円形であるが、規模は直径が40~50cm前後、深さは20~30cm前後でSB01やSB02に比べるとやや小規模である。柱痕跡が観察できる柱穴がないため柱材の規模は不明である。

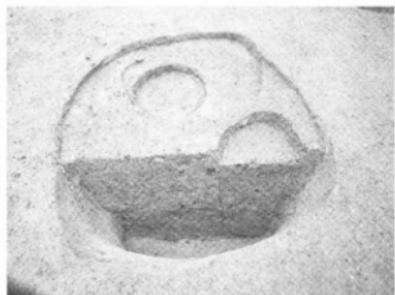
SB04

検出状況 調査区北西で検出されたP2・P3・P12・P26の4基で構成される柱穴群は、規模が大型である点や、柱痕跡が20cm強と太い点、また柱穴の深さが70~80cmと深い点など共通する特徴をもっている。このように特徴が酷似することから、本報告では同一の建物を構成すると考えた。ただし、並びを指摘する意味からあえて建物としたが、最終的な結論はSB02同様隣接地の調査成果に委ねたい。

検出位置 検出位置はSB01の北に位置し、SB02に重なる。P2はSK01を切り込み、P40に切られる。本遺構を建物とすれば、規模は南北2.0m以上、東西2.0m以上であるが、大半は調査区外につながると思われ、検出範囲は建物の南東隅のごく一部と推定される。また、この建物はSB01に比べると柱間が狭く、総柱構造になる可能性がある。さらに柱穴の規模からするとかなり大型の建物であったことも推測される。

この他、P2・P3は柱痕跡を観察できたが、いずれの柱穴も柱材の痕跡が認められないことから柱材は抜き取られたと判断される。P12とP26は検出状況からすると調査区外に柱穴が広がるため柱の芯位置を確認できない。以上のことからSB04を建物だとすると大型の倉などが推測されるが、御蔵遺跡を解明するうえで重要な建物の可能性がある。

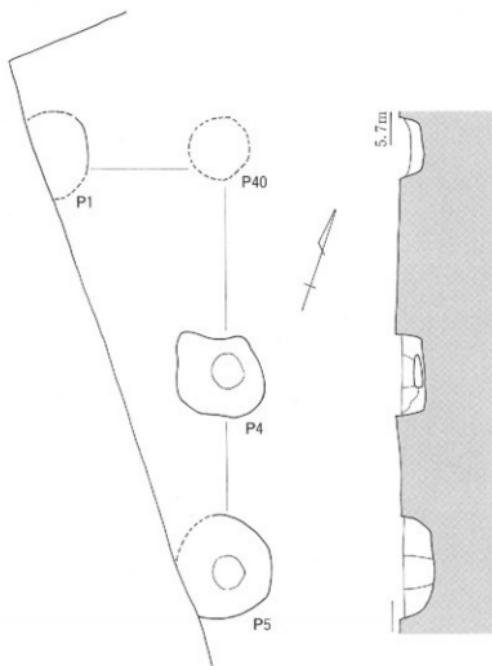
時期 建物の時期はP2から出土した須恵器坏(10)から奈良時代後半頃と考えられる。



第48図 P8(東から)



第49図 P11(東から)

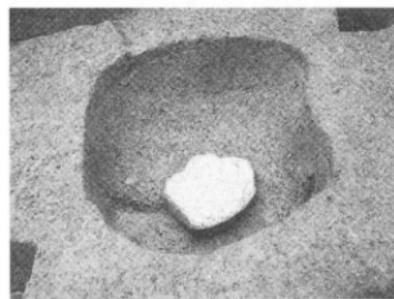


0 2m

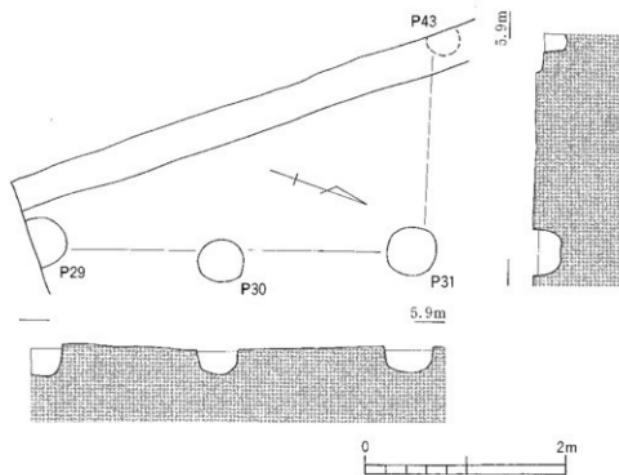
第50図 SB02平・断面図



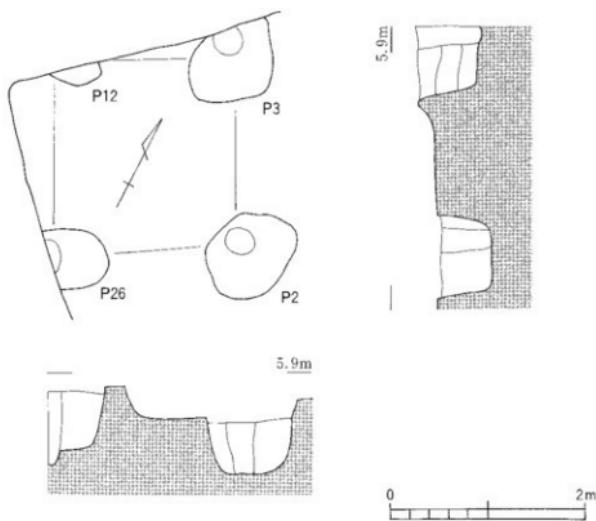
第51図 P 3 (南から)



第52図 P 4 (東から)



第53図 SB03平・断面図



第54図 SB04平・断面図

SK01

検出状況

調査区北側で検出された。SB02の柱穴P40とSB04のP2に切られて検出された。平面形は隅円方形で規模は東西1.8m、南北1.5m、深さ0.3mを測る。

埋 土

2層にわたって堆積しており、上層が砂層で下層がシルト層であった。

出土遺物

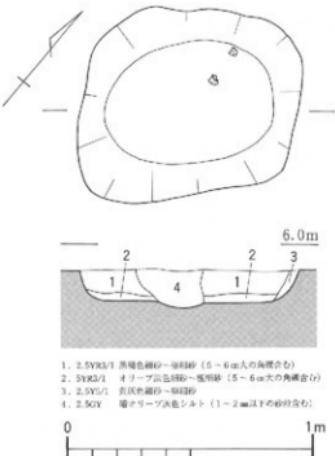
土坑底部からは須恵器坏身2点(7・12)が出土した。遺物の時期は奈良時代であるが、SK01は切り合いで他の遺構に先行すると考えられるため、奈良時代後半よりは古い段階で埋没したものと判断される。

(3) 中世

柱穴群

今回見つかった柱穴の中で直径30~40cm前後以下の小型の一群がある。これらのものは、黒褐色粗砂に黄色シルトを斑状に含んだ埋土で奈良時代前後の柱穴とは構造や特徴が大きく異なる。このうち、P17からは青磁碗(24)が出土している他、包含層中に幾片かの中世遺物が含まれたことから調査区周辺には中世の遺構が存在することが確実である。また、この一群の柱穴の底の深さが検出面から10~15cm以下と浅いため、奈良時代の大型柱穴より上層から掘り込まれたものであることが確実である。これらのことから小型で埋土に黄色シルトを含む一連の柱穴群は中世に下る遺構と判断した。

中世の柱穴群は調査区の制約や近世遺構の擾乱のために建物を復元することはできなかつたがP15・P16・P36・P18のように等間隔で並ぶものも見られるため、今後の調査で建物が周辺に検出される可能性がある。



第55図 SK01平・断面図



第56図 SK01（西から）

3. 遺物

御蔵遺跡では、古墳時代前期から中世にかけての遺物が出土した。しかしその大半が破片であり図化できたものは一部である。その中でも最も多かったのが奈良時代前後の土器群である。

(1) 古墳時代

土師器

壺1・2はSH01より出土した。いずれも口縁部のみの破片である。1は口径が15.8cmで、やや外反気味に立ち上がり、端部を上方につまむ。2は口径が22.2cmで直線的に立ち上がり、端部を尖り気味におさめる。1・2とも磨滅のため調整は不明である。また、2個体を壺としたが2は壺の可能性が残される。

(2) 飛鳥～奈良時代

須恵器

壺蓋は3～6の4個体を図化した。3は復元口径10.8cmとしたが、やや小さくなる可能性もある。口縁部の内面にかえりをもつが、かえりは口縁部を越えて下方に張り出す。4～6はかえりのない個体である。5は丸みをおびた天井部をもち器高が高くなる。口径は14.4cmを測る。4・6はやや器高が低く、口径は4が12.5cm、6が15.5cmを測る。

壺Aは7～11の5個体を図化した。7は体部が大きく内湾し、底部は平底である。口径10.2cmを測り、口縁部に強い横ナデが施されている。底部はヘラ切り未調整である。8は体部と底部の境のみがのこる。底部にはヘラ切り痕が残る。口径は10.0cmを測る。9は口縁部から底部の一部にかけてが残る個体である。体部には横ナデが施される。10は底部のみであるが底径6.9cmを測り、体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部外面はヘラ切り未調整である。11は底部のみで、底部外面はヘラ切り未調整である。

壺Bは12・13・14の3個体を図化した。12は口径14.2cm、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部をさらに外反させる。体部と底部の境は丸みを帯び、高台はやや外側に踏ん張るタイプである。13は底部のみの出土である。2よりも高台が外側に付く。14は底部のみの破片であるが高台が底部と体部の境につき外側にふんばる。

土師器

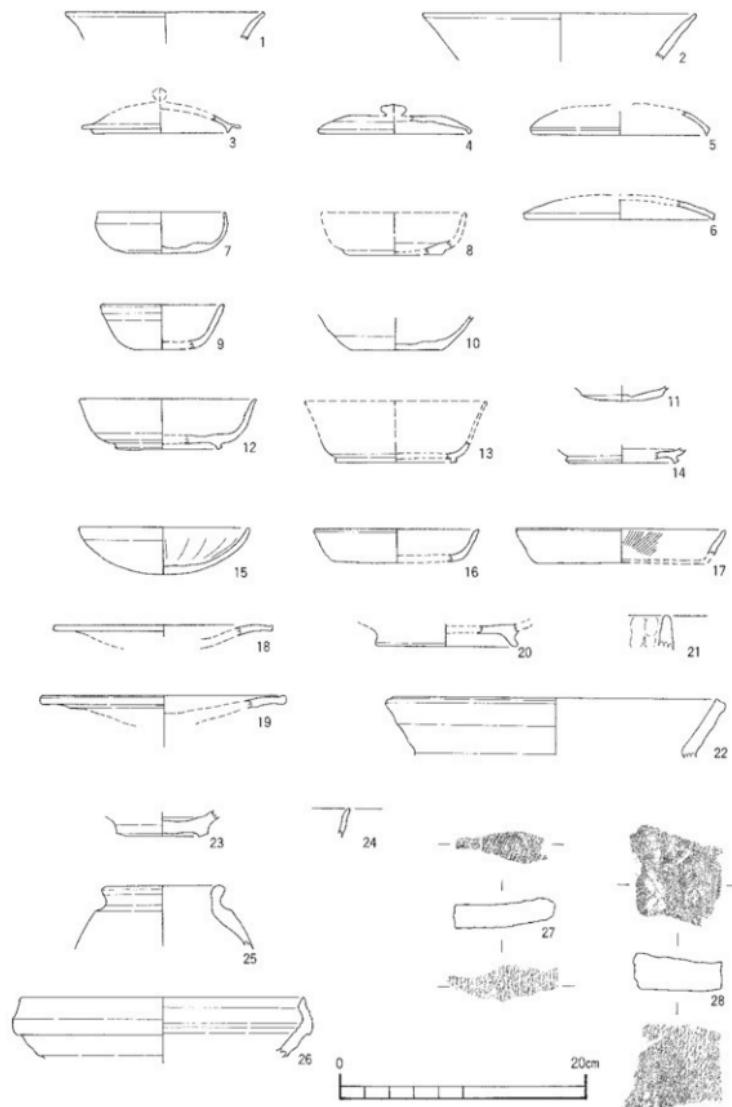
椀は15の1個体のみを図化した。法量は口径13.7cm、器高3.9cmを測る。体部は内湾して立ち上がる。内面には一段放射暗文が施され、口縁部の内外面を横ナデするが、外面の体部下半は未調整である。

壺は16・17の2個体を図化した。壺16は体部がやや内湾し、口縁端部に凹線が施されている。17は口縁部のみであるが復原口径は17.2cmを測る。端部は直線的に外傾して立ち上がる。内面に一段斜放射暗文が施される。

高壺は18・19の2個体を図化した。18は外面に横ナデが観察されるが、内面の調整は不明である。19は内外面共に横ナデが観察できる。

20は皿ないし壺などの底部片で、外側に聞く高台が付く。

製塩土器21は口縁部のみの破片で、口径は約10cmと推定される。粘土経を巻き上げ内面には指頭圧痕が残る。厚手で端部を丸くおさめる。胎土は褐色で砂粒を多く含む。



第57図 出土土器実測図

壺22は「く」の字状に外反する口縁部で口縁端部は体部に対して直交し、やや強い横ナデが施されている。

瓦

27・28は半瓦片である。27は凹面に布目痕が、凸面に繩タタキメが残る。側面はナデている。28は凹面には布目痕が残り、凸面に繩タタキメがある。

(3) 中世

白磁

23は白磁碗の底部片である。外面底部は無釉である。口縁部は残らないが形状から推測すると、白磁碗IV類と考えられる個体である。

青磁

青磁碗24は口縁部片で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は端反りになる。外面ともに無紋、龍泉窯系青磁碗I類に属する。

備前焼

小壺25は口径10cmで、口縁部を玉縁とし、頸部が短く立ち上がる個体である。擂鉢26は口径25cmで口縁部は上下方に拡張する。擂鉢は備前焼第IVB期の個体である。

(4) まとめ

はじめに

以上が御蔵跡で出土した遺物である。出土量はコンテナ5箱分と多くはないが、時期幅が古墳時代前期～中世にまで及び、器種も須恵器、土師器、瓦、青磁、白磁、備前焼など多種に及んでいる。ここではこれらの遺物の出土箇所と時期的な位置づけを行いたい。

遺構の時期

SH01から出土した土師器壺（1・2）は古墳時代前期に位置づけられる。また、図化していないが出土した細片には生駒西麓産の壺片が含まれる。

SB01から出土した遺物は9個体を図化した。P 6から須恵器壺蓋（4）、土師器壺（17）、高壺（18）、壺（22）が、P 7から土師器高壺（19）が、P 8から土師器壺（16）、P 9から須恵器壺蓋（6）、P 11から瓦（28）が出土している。これらの遺物は土師器壺17の内面に一段斜放射暗文が施されることや、それぞれの特徴から奈良時代中～後半頃の遺物と考えられる。

SB02から出土した遺物は2個体がある。P 4からは須恵器壺B（13）、P 5からは須恵器壺A（8）が出土しており奈良時代後半に位置づけられる。

SB04から出土した遺物は5個体を図化した。P 2からは須恵器壺A（10）、土師器皿（20）、P 3からは須恵器壺A（11）、製塙土器（21）が出土しており、それぞれ奈良時代後半に位置づけられる。また、P 12からは須恵器壺蓋（3）が出土しており飛鳥時代に位置づけられる。

柱穴からはP 1より飛鳥時代の土師器椀（15）、P 38より奈良時代の瓦（27）などが出土した。また、P 17からは青磁碗（24）が出土しており柱穴の時期が鎌倉時代以降であることを明らかにした。

土坑SK01からは須恵器壺A（7）、壺B（12）の2点の遺物が出土している。いずれも奈良時代の遺物と考えられる。

この他に包含層からは須恵器壺蓋（5）、壺A（9）、壺B（14）などの奈良時代の遺物や、白磁碗（23）、備前焼小壺（25）、擂鉢（26）などの鎌倉時代～室町時代の遺物が出土している。

このように今回出土した遺物には古墳時代前期より室町時代までのものが含まれる。中でも奈良時代前後の遺物が比較的多いのが特徴である。

〔註〕

- (1) 古代の土器については「古代の土器 1 都城の土器集成」古代の土器研究会編 1992年によった。
- (2) 貿易陶磁器については横出賢次郎・森田 勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館 研究紀要4』1978年によった。
- (3) 備前焼については間壁忠彦・渡子「備前焼研究ノート(1)(2)(3)」「倉敷考古館研究集報 第1・2・5号』1965・1966・1969年によった。

4. 小 結

御歳遺跡ではこれまで大小18次の調査が行われているが、遺跡南部では今回の第9次調査や第3次調査によって、ようやく内容が明らかになってきた。そこで、ここでは第9次調査の概要について触れながら、遺跡南部の様相を簡単にまとめて小結にかえたい。

今回の第9次調査では古墳時代前期、奈良時代前後、中世前半の遺構が検出され、多くの成果があった。古墳時代の集落は第3次調査で存在が指摘されていたが、堅穴住居の検出によってその一端をかいま見ることができた。一方、第3次調査ではさらに下層の砂層に少量の弥生土器の出土を見ているが、状況からすると集落などの生活拠点が築かれるのは本格的には古墳時代頃からと考えたほうが良いようで、今回の調査では弥生時代の遺構・遺物は見つかっていない。

奈良時代

奈良時代は今回の調査で最も成果があがったが、この時期が御歳遺跡南部の一つの盛期と考えてよいだろう。今回検出された遺構は掘立柱建物4棟、土坑1基などである。遺構の切り合いから検討するとそれぞれの前後関係はSB01→SB02、SK01→SB01→SB02などが判明しており、調査地区内の建物で併存するのは1~2棟前後と考えられる。ただし、調査範囲の制限からあまり多くのことを明らかにできないが、建物群はさらに周間に広がることが確実で、特に南を除く三方には大型建物が集中して検出される可能性が高い。このため、この付近が建物群の大きな密集地となることが推測されそうである。

次に、建物群の性格であるが検出された建物の柱穴の規模は総じて大きく、SB01・SB02・SB04は本格的な建物になると考えられる。特にSB04は総柱構造の可能性があることと、柱穴の規模が大きいことから倉などが考えられ、公的施設に関連する建物の可能性も推測される。

このように調査成果からすると今回検出の建物群は一般集落とはやや趣きを異にしており、建物群が密集する点を考え合わせると、当調査区周辺は御歳遺跡の奈良時代を解明する上で重要な地点であると結論される。

また、出土遺物を検討すると奈良時代前後の遺物には、飛鳥時代～奈良時代後半のものまでが含まれ、遺構ではSK01がやや古相を示している。他にも、柱穴の重なりが調査区北部では顕著であることなどからすると、建物群は長期間に渡って同一地点に存在していたことが考えられる。このため本地点周辺の集落の中心時期が奈良時代後半であることは動

かないものの、遺物の時期幅である飛鳥時代～平安時代初頭の期間を通じて集落が営まれた可能性は考えておかなければならぬだろう。

中世 中世については柱穴群の存在から、今後建物などが検出され集落が存在する可能性を示唆した。なお、この時期の遺構はやや上層から切り込んでいる。

隣接地の調査 一方、隣接地の第6－5・3次調査でも奈良時代の集落が見つかった。最も成果のあつた第3次調査では奈良時代後半の大型建物を含む掘立柱建物11棟を検出し、遺物の中に少數の瓦片が認められるなど、集落の時期幅こそ短期間であるが第9次調査の様相に酷似した内容が明らかになっている。さらに、第9次調査に隣接する第6－5次の2地点では小規模ではあるが奈良時代の柱穴群を検出している。これら一連の遺構群は少なくとも奈良時代後半の同一建物群の広がりをとらえたものと解釈され、御蔵遺跡南部の建物群がこの時期に最大規模に達したことを提示してくれる。但し、今回の調査の状況からすると建物群はさらに西側に延びることも確実で、様相の把握とともに範囲の確定は今後の調査に委ねられるところが大きい。

第4章 ま　と　め

3次におよぶ調査で明らかとなった点は以下の通りである。

1. 第8・10次調査では、弥生時代後期から弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内期）の遺構を検出した。

検出した遺構は、貯蔵穴・土坑・溝・水田跡などで、集落の周縁的様相を示すものである。調査の結果、調査区の西側ほど地形的に後背湿地的様相を示しており、この地区に水田がつくられている。したがって、集落の中心は、調査地より東側あるいは北側にあるものと考えられる。

また、今回の調査で明らかとなった弥生時代後期の遺構は、御藏遺跡では最も古く位置付けられるもので、当遺跡の形成を考えるにあたって、大きな成果といえよう。

2. 第9次調査では、古墳時代前期・奈良時代そして中世の3時期におよぶ遺構を検出した。

特に、奈良時代の大型の掘立柱建物跡は、当遺跡の性格を考えいくうえで、重要な発見といえよう。

また、古墳時代前期の住居跡については、第8・10次調査の第1面で検出した遺構の時期と大差ないものと考えられる。したがって、集落の中心が、若干南側へ移動したことも考えられる。この前提として、時期を追うごとに微高地が南側へ拡大していくことも考えられる。

報告書抄録

| ふりがな | みくらいせき | | | | | | | |
|----------------|---|--------------------|---------------------|-------------------|-------------------|---------------------------|-------------------|------------|
| 書名 | 御藏遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 第8・9・10次調査 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 山田清朝・高木芳史・山上雅弘・岡本一秀 | | | | | | | |
| 編者機関 | 神戸市教育委員会文化財課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-5799 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2000(平成12)年12月28日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 御藏遺跡 (第8次) | 神戸市長田区 御藏通5丁目 | 28110 | | 34度 39分 36秒 | 135度 9分 20秒 | 1998年 9月16日～ 10月29日 | 290m ² | 共同住宅建設 |
| 御藏遺跡 (第9次) | 神戸市長田区 御藏通5丁目 | 28110 | | 34度 39分 33秒 | 135度 9分 21秒 | 1998年 10月5日～ 28日 | 90m ² | 作業場兼個人住宅建設 |
| 御藏遺跡 (第10次) | 神戸市長田区 御藏通5丁目 | 28110 | | 34度 39分 36秒 | 135度 9分 20秒 | 1998年 11月4日～ 20日 | 171m ² | 社屋建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 御藏遺跡 (第8次) | 集落跡 | 弥生後期 | 貯蔵穴 溝 | 土器 梯子 | | | | |
| 御藏遺跡 (第9次) | 集落跡 | 古墳前期 奈良時代 中世 | 住居跡 掘立柱建物跡 柱穴 | 土器 | | | | |
| 御藏遺跡 (第10次) | 集落跡 生産跡 | 弥生後期 | 溝 土坑 水田跡 | 土器 | | | | |

御 蔵 遺 跡

—第8・9・10次調査—

2000. 12. 28

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-5799

発 行 水山産業株式会社
神戸市長田区二番町3丁目4番1号
TEL 078-576-3164

神戸市広報印刷物登録・平成12年度 第140号（広報印刷物規格A-6類）



この骨子は、古紙100%の
再生紙を使用しています。